

絃寿会 秋のしらべ

とき 令和8年11月22日（日）12時半

ところ 札幌サンプラザ（北24条西5丁目）

4F すずらの間

斎藤武幾久 （TEL）090 - 8273 - 1341

1 上を向いて歩こう

水野利彦 編曲

一箏 日下みき子 渡辺佳子
金谷悦子 佐藤美智子
二箏 舟生武美恵
尺八 中田昂恭山

2 月下美人

吉崎克彦 作曲

一箏 日下みき子 渡辺佳子 金谷悦子
二箏 舟生武美恵
十七絃 斎藤武幾久
尺八 米田統山 中田昂恭山

3 鷹

沢井忠夫 作曲

一箏 浦川緑
二箏 斎藤武幾久

4 たぬき

鶴山勾当 作曲

三絃本手 斎藤武幾久 坂倉武啓
浦川日向 浦川緑
三絃替手 舟生武美恵 小野武由喜

(休憩)

5 高麗の春

宮城道雄 作曲

箏	浦川日向
三絃	斎藤武幾久
尺八	米田統山

6 新道成寺

作曲者 不詳

箏	坂倉武啓
三絃	斎藤武幾久
尺八	米田統山

7 氷華二題

吉崎克彦 作曲

一箏	小野武由喜
二箏	斎藤武幾久

8 光のしずく

吉崎克彦 作曲

一箏	舟生武美恵
二箏	斎藤武幾久

解説と歌詞

上を向いて歩こう

1961年に発表された坂本九さんの国民的楽曲 各国で「スキヤキ」の愛称で親しまれている

月下美人

人知れず咲始めその夜のうちに萎んでしまうという花として知られる月下美人
一夜かぎりの華やかさと儚さはすぐに減衰してしまう箏の音色にも似ている 優しい旋律を弾くとき箏はもっとも華やぐ その箏の清楚な華やかさを「月下美人」にたとえて作曲してみた
(作曲者解説より)

鷹

はなやかに飛翔する曲の感じから「鷹」と名付けられた かなり大きな部分をしめる中間部が
とてもロマンチックなので鷹の勇猛な姿よりも悠々と飛ぶ姿を想像させる (楽譜解説より)

たぬき

「おどけもの」又は「作物（さくもの）」と言われるジャンルに属する 外の作物としては
「あれねずみ」「蛙」「都十二月」などの曲もある
森の中で猟師がたぬきを撃とうとすると たぬきは「お腹に子を宿している どうか助けてくれ」と頼む 猟師は哀れんで撃つのをやめるとそのお礼に自慢の腹鼓を打って聞かせる
猟師は感じ入り殺生はやめると言い帰っていく
腹鼓を表す三絃の手事が面白い

ゝ さるほどに八丁敷村の片ほとり 年古る狸候いしが かねてねがけし狩人が 鉄砲おろし
玉薬火縄をつけて狙い寄る 狸たまらずバサバサと這い出て のう暫く待ちたまえ
あの岩陰の森の内 男狸が居り申す 夫婦の仲も睦まじく互いに変わるな変わらじと
言い交わした睦言に 身持ちになって身も重く それをお前に撃たれては 腹なる我が子は
聞から聞 どうぞ助けて下されと手を合わせてぞ頼みければ狩人ともに涙ぐみ 人間畜生と
かわれども恩愛の嘆き変わらじと鉄砲おろし立ち上れば 狸大きに喜んで命助かる御礼
には 我が妙得たる腹鼓只今聞かせ申さんと 腹なでおろし座をしめ (手事)
狩人んと感じ入り ちいちぼうぼの打ち分けは真の鼓み勝るべし 命永らえ暮すべし
我々とても殺生は必ずこの後やめんとて 笑うてこそは帰りけれ

高麗の春

昭和6年に作曲された手事物 朝鮮の早春の情緒を表現している 三絃、箏、尺八という古典的な楽器編成をとるが各楽器の独立性が高く宮城道雄独自の三曲合奏を構成する

(楽譜解説より)

㊦ 冬籠り 春去り来れば高麗の山 よそおいこらす白妙の 雪もいつしかむら消えて
末は合わんと雪解水 流れてやまぬ山の峽 儒臣の夢も滅びては 草萌えしるき墓どころ
里に出ずればいささ川 えにしも知らず行き通う 石橋渡る鄙びとに隔てもおかぬ御恵や
(手事)

うららかさ 日ねもす岸に衣洗う 高麗少女らが水砧 城外の春 風光り つづく芝山
そちこちに 干す白衣のひまぬうて 逝く水早もぬるみけり

新道成寺

謡曲「道成寺」を原拠とする 安珍清姫伝説で知られる道成寺が舞台であるが 他に
道成寺ものとして「古道成寺」「新娘道成寺」「京鹿子娘道成寺」などもある

㊦ 花の外には松ばかり 暮れ初めて鐘や響くらん暮れ初めて鐘や響くらん ひびくらん
鐘に恨みは数々ござる 先ず初夜の鐘を撞く時は諸行無常と響くなり 後夜の鐘を撞くと
きは是生滅法と響くなり 晨鐘の響きには生滅々己 入相は寂滅為楽と響けども 我は後生
の雲晴れて 真如の月を眺め明さん 道成卿は承り初めて伽藍たちばなの道成興行の寺なればとて
道成寺とは名づけたり 山寺の春の夕暮れ来てみれば入相の鐘に花や散るらん さるほどに
さるほどに寺々の鐘月落ち鳥啼いて霜雪天に 満ち汐ほどなく日高の寺の江村の漁火も愁いに対し
人々眠れば良き隙ぞとて 立ち舞うようにねらい寄って撞かんとせしが 思えばこの鐘うらめしや
とて 龍頭に手をかけ飛ぶよと見えしが 引きかづいてぞ失せにける

氷華二題

静の「彩氷」と動の「氷河」の二部から成っている 自然の雄大さ激しさを感じさせる
抒情的な光景を思いうかべながら作曲した

(作曲者解説より)

光のしづく

やわらかな陽射しがまるでしづくのような清涼感をもって体にしたたる
それは子供に対する愛情にも似た穏やかさで安らぎに満ちた「光」輝くひととき
であった

(作曲者解説より)

「ハーモニクス」の多用がこの曲を透明感のあるものになっている。